

最後に、ベクトル方程式について一言...

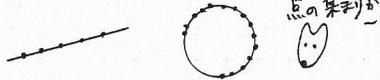


そもそもベクトル方程式とは、図形の性質(特徴)をベクトルを用いて表現しただけのものです。扱う図形も、直線と円だけです。"方程式"という言葉に惑わされてはいけません。にもかかわらず、「難しい」とか「わけわからん」と苦手意識を感じる人が多いのは、次にあげるベクトル方程式の基本理念が、しかりと身につけていないからでしょう。

Point ↓

★ベクトル方程式を考えたときの基本理念★

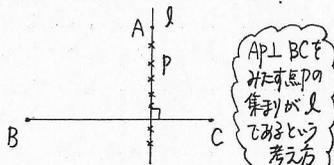
- ① 図形を点の集まりだと考えること。
- ② 図形の性質(特徴)を意識しなから、その点に共通する性質(特徴)を考える。
- ③ その性質(特徴)を式又は言葉で表す。
- ④ ③の式、又は言葉をベクトルを用いて表現する。→ ④が求める図形のベクトル方程式。



(→ 具体的には、図形上の任意の点をPとおいて、Pの位置ベクトル(つまり \vec{OP}) についての関係式をつくります。このときは問題文に書いているのでその指示に従えばよいでしょう。)

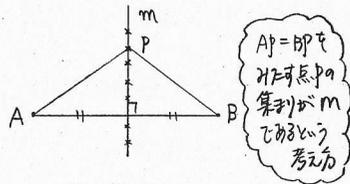
★その他の図形のベクトル方程式 ... 上のPoint ↓をもとにその他の図形を考えてみよう。

(1) 点Aから直線BCへ下ろした垂線 l



上の点をPとすると $AP \perp BC$
ベクトルで表現すると $\vec{AP} \cdot \vec{BC} = 0$
∴ $(\vec{OP} - \vec{OA}) \cdot (\vec{OC} - \vec{OB}) = 0$

(2) 線分ABの垂直二等分線 m



m 上の点をPとすると $AP = BP$
ベクトルで表現すると $|\vec{AP}| = |\vec{BP}|$
∴ $|\vec{OP} - \vec{OA}| = |\vec{OP} - \vec{OB}| \dots \textcircled{1}$

⑤ ①と②が全く同じ式であることを示す。

② $\Leftrightarrow \vec{OP} \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) - \vec{OA} \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) = 0$

$\vec{OP} \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) - \left(\frac{\vec{OB} + \vec{OA}}{2}\right) \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) = 0$

同じ式!!
同じ式!!
 $2\vec{OP} \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) - (|\vec{OB}|^2 - |\vec{OA}|^2) = 0$
 $2\vec{OP} \cdot (\vec{OA} - \vec{OB}) = |\vec{OA}|^2 - |\vec{OB}|^2 \dots \textcircled{3}$

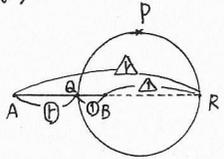
(ABの中点をMとすると $MP \perp AB$ ので (1)の考え方を同じと $\vec{MP} \cdot \vec{AB} = 0$ としてよいです。
 $(\vec{OP} - \vec{OM}) \cdot (\vec{OB} - \vec{OA}) = 0 \dots \textcircled{2}$)

① $\Leftrightarrow |\vec{OP} - \vec{OA}|^2 = |\vec{OP} - \vec{OB}|^2$
 $|\vec{OP}|^2 - 2\vec{OP} \cdot \vec{OA} + |\vec{OA}|^2 = |\vec{OP}|^2 - 2\vec{OP} \cdot \vec{OB} + |\vec{OB}|^2$
 $2\vec{OP} \cdot (\vec{OA} - \vec{OB}) = |\vec{OA}|^2 - |\vec{OB}|^2 \dots \textcircled{3}$

よって①と②は全く同じ式です。③を垂直二等分線のベクトル方程式だとする事もありますが、ほくは①がバスターだと思えます。

(3) アポロニウスの円 ... 2定点からの距離の比が一定である点の集合は円になります。この円のことを"アポロニウスの円"といいます。

$\frac{AP}{BP} = r$ ($r > 0, r \neq 1$) とすると、点Pの軌跡は線分ABを $r:1$ に内分する点Qと $r:1$ に外分する点Rを直径の両端とする円になります。2点Q,Rの中点が円の中心で、QRの長さが円の直径です。



(なお、 $\frac{AP}{BP} = 1$ の場合が、ABの垂直二等分線であることに注意しよう)

(例) $|\vec{AP}| = 2|\vec{BP}|$ を満たす点Pはある円上にあることを示せ。 (この方は成分計算で処理しますが、ベクトルでも可)

$$|\vec{OP} - \vec{OA}| = 2|\vec{OP} - \vec{OB}|$$

$$|\vec{OP} - \vec{OA}|^2 = 4|\vec{OP} - \vec{OB}|^2$$

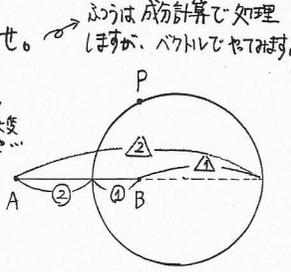
$$|\vec{OP}|^2 - 2\vec{OP} \cdot \vec{OA} + |\vec{OA}|^2 = 4(|\vec{OP}|^2 - 2\vec{OP} \cdot \vec{OB} + |\vec{OB}|^2)$$

$$3|\vec{OP}|^2 - (2\vec{OP} \cdot \vec{OA} - 8\vec{OP} \cdot \vec{OB}) + (|\vec{OA}|^2 - 4|\vec{OB}|^2) = 0$$

$$3|\vec{OP}|^2 - (2\vec{OP} \cdot \vec{OA} - 8\vec{OP} \cdot \vec{OB}) + (|\vec{OA}|^2 - 4|\vec{OB}|^2) = 0$$

$$(3\vec{OP} - (2\vec{OA} - 8\vec{OB})) \cdot (\vec{OP} - (2\vec{OB} - \vec{OA})) = 0$$

$$\left(\vec{OP} - \frac{2\vec{OA} + \vec{OB}}{3}\right) \cdot \left(\vec{OP} - (2\vec{OB} - \vec{OA})\right) = 0$$



$\left(\vec{OP} - \frac{2\vec{OA} + \vec{OB}}{3}\right) \cdot \left(\vec{OP} - \frac{-\vec{OA} + 2\vec{OB}}{2 + (-1)}\right) = 0$
よって点Pは、ABを $2:1$ に内分する点と $2:1$ に外分する点を直径の両端とする円上である。//

(注) $(\vec{OP} - \vec{OA}) \cdot (\vec{OP} - \vec{OB}) = 0 \Leftrightarrow$ ABを直径の両端とする円」を示した。 (注) アポロニウスの円は、結果を知れば、計算しなくてもどんな円なのか仮定できますが、暗記で答えを出すのではなく、上の成分計算をキチンとできるようにしてほしいです。

さて、これまでいろいろとベクトル方程式を紹介してきましたが、実は大学入試において「ベクトル方程式を求めよ」という問題はほとんど出題されません!! (マジで? カッ) "だから別にやらなくてもいいやん!!" という声が聞こえてきそうですが、実はベクトル方程式を求めないのでなく、逆に与えられたベクトル方程式をみて、どんな図形を表しているのかを考える問題がほとんどなのです。最初から図形の仮定が正しいとしないとは、その後の解答に大きく影響します。だから、ベクトル方程式の考え方、知識は絶対に必要なのです。 (みんなやればわかるの...) 与えられたベクトル方程式をみて、どんな図形を表しているか、すぐに仮定できますか?

$|\vec{OP} - \vec{OA}| = |\vec{OA}|$ $|\vec{OP} - \vec{OA}| = |\vec{OP} + \vec{OA}|$ $(\vec{OP} - \vec{OA}) \cdot (\vec{OP} + \vec{OA}) = 0$

ここで人はもう一度、犬吠りを復習しておこう!!